

ベルクソン哲学の「生」は死を越えるか

小関 彩子

はじめに

H・ベルクソンの哲学に人が言及する際、必ずその名に冠せられるのは、「生の哲学」という呼称である。人間存在を「生」の視点から見るみにした彼の思想を理解するためには様々な方法が可能であろう。それらの諸方法の内にあつて本論文においては、「生」に相対するための手掛かりとして、これを「私の生」に限定して考える。我々が生を問うてやまないのは、すなわち我々全てにとって私とは何か、私の生とは何かという問題が常に重要なものだからである。ベルクソンは「意識と生」と題する一九一一年の講演の冒頭において「我々はどこから来たのか。我々とは何か。我々はどこへ行くのか。」[ES2]という問を発している。人間の起源や本性、運命の問題を問うことで、意識と生の本質を洞察しようとするのである。

この問から出発するに当たって我々は、さらにそこに「死」という補助線を引いてみることにする。すなわち私とは何か、という問いを探索するための方法として、この問を私における何が生んだら、私が死んだと言えるのだろうか、という問いに読み替えてみるのである。

それはつまり生を死との対比において考えるということである。それでは、私が死ぬ、すなわち生から死へと移行する、とはどういうことなのだろうか。どのような事態を指して、私が死ぬ、言うことが出来るのだろうか。

もとよりベルクソンは死を主題的にその思索の俎上に載せてはいないのであるが、彼の生の哲学をその裏側である死が逆照射してくれることは期待出来るだろう。ベルクソン哲学を基本に据えた時、生ける私の真の姿はどのようなものになるのだろうか。本論文は私の生に、彼にとつては非主題的な問題に止まっている死、すなわち「私」というものが失われるということはいかなる事態なのか、という問のほうから迫るといふ試みである。

1 身体の死

さて、通常我々は死を考えるに際して、何をもって人の死を定義しているのだろうか。私の身体が機能を停止し、その物理的・空間的な肉体が失われれば、すなわちそれが私というものが死んだということであると考えるのが、最も一般的な解釈であろう。このことから、

我々は「私」を「私の身体」と重ね合わせて見ているのだと言うことが出来るだろう。世間一般に受け入れられているのは、私の死とは身体としての私の死である、という考えなのである。このような一般的な死理解をその根拠に踏み込んで考察してみると、そこには様々な困難が露呈して来る。

そこで、まず仮に私とはすなわち私の身体のことであると考えるみよう。そうすると、身体の死については医学や生物学が様々な研究成果を提供してくれるだろう。しかしながら、身体であるところの「私」性を自然科学の立場から定義づけることは、未だ明らかに為されていないようである。

例えば身体的な意味において自己と非自己との境界を峻別する手掛かりとして、免疫が注目されている。これは身体を保全するために、自己の体内に侵入した異物を自己ならざるものと判断して攻撃・排除するシステムである。このことから、免疫システムが私の身体の自己同一性を決定し、維持していると考え得る。しかしながら、我々の体内には種々の生体が共生、あるいは寄生しており、どこまでが自己の範囲内であるか、その境界を厳密に決定することは免疫学によっても困難であることが示されている。

また生物学の発達には、私という存在を遺伝子の面から明らかにする可能性を開いているように見える。自己と全く同一の遺伝子を持ったクローン人間を私と同一人物だと考えられるとするならば、私とはすなわち遺伝子であると言うことが出来るよう。しかし、たとえ遺伝子が同じ一卵性双生児であっても、出生の瞬間から二人は各々の成育環境において異なった体験を経、異なった感情を経験して成長し、自己に

固有の思い出、記憶を蓄積して各々の人格を形成して行く。ペルクソンも自我の奥底に存在する記憶こそ、真の自己自身であると考えている。結局私の目の前にいるこの他者、同一の遺伝子を共有してはいるが異なった人格を持つ相手を「私」だと考えることは出来ないだろう。それでは、身体のレベルで自己を確定することは出来ないのだろうか。卑近な例で考えてみても、例えば毛髪や爪は日々身体から離れ去って行く。さらには事故などによって肢体の一部が失われることもあり得る。それでも我々は、「私が死んだ」とは言わない。また、我々の体細胞は数年で全て入れ替わると言われているが、だからと言って、数年前の私は死に、現存しているのは別の人間である、とは考えられていない。また現代では、入れ替わるのが自己の細胞とは限らない。移植によって私の臓器の幾つかが「他者」の身体の内では機能し続けることも、私の身体の一部が他者の臓器と交換されるようなことも行われているのである。

現代医学の進歩がもたらすこのような成果から見ると、次のようなインドの説話もあながち非現実的とは思われなくなる。ある旅人が空き家で一夜を明かしていると、一匹の鬼が死骸を担いでそこへやって来る。そこへもう一匹の鬼が来て、旅人の手を引き抜いて床に投げ付けた。前の鬼は同情して、死骸の手を持って来て、代わりにつけてくれた。後の鬼が脚を抜くと、また前の鬼が死骸の脚をくつつける。このようにして旅人と死骸の体とがすっかり入れ替わってしまった。二匹の鬼はそこで死骸を半分ずつ食って出て行ってしまった。驚いたのは旅人である。今ここに生きている自分は、一本本当の自分であろうかと考えると、分からなくなってしまうていた、というものである。⁽¹⁾

この古代の男の疑問に、現代の科学はどのような解答を与えてくれるであろうか。

移植されたのが脳である場合、問題は一層複雑になるだろう。脳死が認められるようになりつつある現在、脳の死がすなわち私の死である、と考えられ始めているようである。ここから、私とは脳であるという考えが導き出され得る。しかしながら、脳そのものを摘出し保存したとして、身体全体の有機的統一から離脱したそのような一器官を「私」自身であると考えすることは不可能である。ベルクソンもまた脳に真の自我の所在を認めることを否定し、記憶が脳に還元され得ないことを示しているのである。

2 静的宗教における死

以上において、一般に流布している身体 \parallel 私という暗黙の考えを吟味し、それらが未だ曖昧さを残していることを指摘して来た。それでは、私の死を私の身体の死と同一視することは出来ないであろうか。

死の問題を正面から取り扱うことの少ないベルクソンが死について言及する数少ない例として、『道徳と宗教の二源泉』において静的宗教が持つ仮構機能 (fonction fabulatrice) を批判した箇所を挙げる事が出来る。ここでベルクソンは、身体の死を人の死と考える一般的な死生観がもたらす帰結を描いて見せている。

そもそもなぜ我々は誰かが死とは何かについて考えずにはいられないのだろうか。それは、我々全てが、己がいつか必ず死ぬことを「知

って」といると考えているからに外ならない。死とは一般的、抽象的な問題ではない。それは常に、いつか必ず訪れるであろう己自身の死に向けられた切実な問なのである。私が死ぬとはいかなる状態なのか、死ねば自分はどうなるのか、自己の死をどのように意味付ければいいのか、どのようにしてそれに相対すべきなのか、といった問は、我々が生から死に移行するその時まで常に我々の脳裏を離れることがないのである。

それでは、我々はなぜ自己が死すべき運命にあると考えているのであろうか。未だ死を経験したことがない我々生ある者にとって、それは他者の死を通じてでしかあり得ない。子供は身近な生物、昆虫や動物の死に接して、死というものがあることを学ぶ。我々の周囲の人間の身体の機能が停止して、二度と回復しなかったという経験は、生から死への移行の不可逆性を我々に知らしめる。他の生物、他の人間の身体は死んでもはや帰って来ないのであるから、それらの諸事実に鑑みて、同じように私の身体もまた失われるということを我々は確信するようになる。

ベルクソンは、死という一般観念を持つことが出来る点を、動物と区別される人間の特徴として挙げている。動物は生きているものと死んだものとを区別することは出来るが、生そのものについて、あるいは死一般について考えるという事はない。それゆえ、他の動物の死に接することがあっても、そのことから自分もまた死なねばならないという事を予見することはない。このように生に釘付けされ、本能によって機械的に行動するのみである動物に対して、人間は自然から知性を付与されており、それゆえに自由に行為することが出来る、独

立した創造的個体である。こうして知性を持つようになった結果人間には反省が生まれ、反省は我々と生との間に乖離を生じさせる。この知性によって人間は目先の利益を離れた観察を行い、当面の利害とは結び付かないそれらの観察を比較し、帰納し一般化することが出来る。自分の周囲の生き物で死を免れたものは一つもないという事実を確認し、そこから、自分もまたやがて死ぬという結論を導き出すのである。[Cf. DS134~136]

この結論は生ある我々に不安を抱かせる。常に現在のみに生き、生の内に没入している諸生物と異なり、知性的存在はもはやひたすら現在だけに生きるものではない。反省のあるところに必ず予見があり、予見のあるところに必ず不安があり、不安のあるところには必ず生への密着に隙間が生じる。[Cf. DS222]

このような不安を慰撫するために、我々は様々な手段を講じる必要に迫られることとなる。自己の死を恐れて意気阻喪に陥ってしまうことに対する保障、知性によってもたらされた死の表象に対する自然の防御反応としてベルクソンが挙げるのが、宗教である。社会の内にあるのであれば人類はあり得ないのであるが、この社会が個人に要求するものは、昆虫がその自動機制の内ですべて没我の状態にあるような種類の無私である。しかし、人間の知性はむしろエゴイズムをもたらし、反省は無私の態度から自我を解放する。その結果、社会は解体の危機に晒されることとなる。この反省という知性に、知性で対抗するのが静的宗教である。それは、ちょうどお伽話を聞かせて子供を寝かしつけるように、物語を話して聞かせて人間を生へ結び付け、従ってまた個体を社会へと結び付けるという役割を担っている。[Cf. DS

222~223]

この物語が語るのは、死後の生の可能性についてである。「死が不可避だという観念に対して、自然は、生命の死後への存続というイメージを対抗させる。」[DS136] 社会の構成員である個々人がこの先の生存に安心することが出来なければ、社会の安泰は脅かされる。そこで、死者がいつまでも共にいてくれるということを我々は頼りにするようになる。その次に祖先崇拜が起こってくる。そのためには死者が神々に近いものでなければならず、さらには神々が存在していなければならぬ。そこから何らかの祭祀が行われ、神話が形成されることとなる。原始的な理論的着想は、視覚によって見られる自己の身体の視覚像と触覚によって触れられる身体の触覚像を、相互に独立し、同じように実在するものと考ええる。水面に映った身体の像は、触れられる身体とは別個の実在であると考えられる。それは触れることの出来るこの身体から剝離され、中身を抜かれて重さを失ったもう一つの身体が、瞬時に水面に移ったものである。ここから、それ自身として生き続け得る身体というイメージが導き出される。しかしながら、この視覚像が死後にも生き残るという証拠はどこにもない、とベルクソンは批判している。とにかく何か生き続けなければならぬという原理がまず始めに確立されているからこそ、生き残るとすればそれは不動で、しかもやがては腐敗してしまう触れられる身体ではなく、どこへでも逃げて行ける身体の視覚像のはずであり、人間は影や幻の状態でいつまでも生存していられるという信念が確立するのであって、その反対ではないのである。[Cf. DS138~139]

死後に存続するはずのものは、時代が下るとともに洗練されて来

る。それは遍在し、肉体に生命を与える原理、魂の実質を構成するもの、生物がそこから汲むある力の貯えと考えられ、そしてついには靈魂に集約されるようになる。[Cf. DS14] 知性の持つ仮構機能によって生み出されたこれらの觀念は非常に不合理で、冷静に考えれば到底信じるに値しない物語に過ぎないことが多い。しかしベルクソンはそれがいかに荒唐無稽で、道理上は認められないものであろうとも、我々がそれをどうしても必要としている以上、受け入れざるを得なくなるのだ、と分析している。

このように「私の死」を「私の身体の死」と考える一般的な死の解釈は、死後の生という物語を与えてくれる静的宗教を生み出した。我々の知性が仮構機能によってつくり出したこの觀念は、いつか訪れる己の死に対する前もつての恐怖、身体が失われることに對する不安を糊塗するためにつくられたものであって、經驗に基づいて確証されたものではないのである。

3 記憶の保存

3. 1 精神と死

以上で、身体の死は私の死とは認め難いということが論証された。それでは、身体ではなく私の精神の死こそが私の死なのであろうか。例え身体の機能は保全されていたとしても、精神が致命的な障害を負っていたら、それは生ける屍に過ぎないのだらうか。もはや精神が働いていないように見える植物状態や脳死は、死を意味しているのであらうか。しかしながらベルクソンは、一般に精神の死と思われている

状態は単に身体上の死でしかないと考えている。なぜならば彼は脳を精神と等置することをせず、それを身体の一部に位置付けるからである。

発狂もまた脳の極度の疲労から由来すると思われる。これは通常の疲労と同じように、神経系の諸要素にある特殊な毒素が蓄積して引き起こされるのであるらしい。そうだとすれば、精神錯乱における精神的平衡の破壊は、専ら有機体の中に打ち立てられた感覚Ⅱ運動的諸関係の攪乱から生じると考え得る。この攪乱によって記憶力と注意力は、現実との接触を失われしめられるのである。[Cf. MM194~195]

それでは、我々が身体の死を迎えた後、なお存続する生というものはあり得ないのであろうか。身体の死とともに私を死が襲うのだろうか。静的宗教の持つ死後の生という神話を批判しながら、しかしベルクソンは死後の生を認めているのである。では、我々が身体の死を迎えた後、なお存続するものとは何であらうか。ベルクソンはそれを記憶であると考えた。その証拠として彼が詳述しているのが、脳から独立した記憶というものが存在するという点である

3. 2 記憶と脳

ベルクソンは記憶、すなわち過去の保存に、運動機構(mécanismes noteurs)におけるものと独立的な記憶におけるものと二つの種類の形式を区別する。[MM82] 前者は過去を身体の運動機構に刻み込むという形で行われる。一般に記憶の名のもとに研究されるものはこちらであり、これは単に過去を身体的に演ずる習慣には

かならない。例えばある一つの文章の暗唱は、精神的次元に属する作業ではあるが、にもかかわらずそれは一つの習慣の獲得である。そうして、ベルクソンは習慣を全て身体的であると見なしている。

これに対して、その文章を暗唱するために行った一回一回の練習の情景は、それぞれが私の人生において一つの日付を持った出来事として自足し、反復することの出来ない異質な思い出である。これは我々の日常生活の全ての出来事を、それらが起こるままに記憶心像 (image-souvenir) の形で記録する。それは出来事のいかなる細部も省略しない完全な再現表象であり、各々の事実をそれが行われた場所と時間と共に記憶する。それは有用性への顧慮なしに、すなわち行動に役立てるためではなしに、自発的な必然性をもって、過去の姿を保存する。以前に知覚した事物の知的あるいは知性的な再認が可能になるのはこちらの記憶によってなのである。[Cf. MM86] 記憶力 (mémoire) とは、我々が生まれて以来の全ての事象をそのまま保存する、個人的で自発的な記憶である。[MM88] これこそ真に持続する意識である。純粹記憶は保存した過去を、必要に応じて記憶 (souvenir) として再現する。ここで起こっていることは、総ての記憶をその独自性そのままに保存し、気まぐれにそれを再生することだけである。

「意識がそれら〔外的世界について継起的だと言われる諸状態〕を保存するのは、それらの外的世界の多様な状態が意識事象を引き起こし、それらの事象が相互に浸透し、知らぬ間に有機化して全体をなし、この連帯性そのものの効力によって過去を現在に結び付けるからである。」[Essai39~90] 自我の根底には、物質の世界において身体

が知覚したイメージが過去一般という存在論的即自態において保存されている。「記憶内容は、それ自体で保存される」[PM80] のである。

さて、このような我々の記憶とは、脳に保存されているのであろうか。ベルクソンは神経系の機能について詳細に考察した結果、その役割を、感覚器官と運動器官の間を繋ぐことに限定した。外界から感覚器官に与えられた刺激は感覚神経を通じて脊髄に伝達され、反射運動となって運動神経を伝わり、運動器官において実現される。刺激が大腦を経由する場合には、感覚の受容と行為の発動との間にある程度の遅延と選択が見られるが、本質的な役割は変わらない。「意欲的な運動の場所とされた脳のローランド溝は、入って来る列車を係員がそれぞれの方向に向ける転轍機に比較出来る。またこれは、外から与えられた刺激を任意の発動装置に連絡する伝達者である。」[ES44] 大腦は行動にとって有用な感覚・記憶を選択する転轍機に過ぎない。

我々の過去は必然的自動的に保存される。過去はそっくり生き残っている。しかし我々の実際の関心は、過去を斥ける、若しくは少なくとも現在の状況をいくらかでも有利に解明し補足することが出来る過去だけしか受け入れない。大腦はこの選択を実行するために用いられるのである。[PM152]

この大腦の役割を明らかにするために、ベルクソンは皮質の局所的損傷に対応する表象的記憶力の障害の例を検討している。精神盲や精神聾などの視覚的・聴覚的再認一般、あるいは失読症や言語聾などの言葉の再認といった障害は、記憶が損傷部位に所在していることから全く由来していないとベルクソンは結論づける。これらの障害の原

因は、一つには我々の身体が、外から来た刺激に直面して、記憶の選択の働きを媒介する確な態度をとり得ないことにある。もう一つは、記憶がもはや身体の中に適合する支点、すなわち行動へと発展する手段を見いださなくなることである。[Cf. MM118]

行動のためには、我々は感情的経験を視覚や触覚や筋肉感覚の可能的所与に翻訳することが不可欠である。しかしこのように感情的感覚を身体のある部分に限局することは、単に教育によって習慣づけられたに過ぎない。記憶は身体との関わりによってしか現実化しないのであるが、にもかかわらず記憶と物質・身体・脳は本性を異にしているのである。

以上のようにベルクソンは、人間の心的活動は脳の活動からはみ出していること、脳は運動習慣を蓄積しても記憶を蓄積するのではないこと、思考の他の諸機能はさらにはっきりと脳から独立していることを示して来た。脳の役割とは過去を保存することではなく、まず過去を覆い、次に過去の中から実際に有用なものを透かして見せることにある。脳は精神から運動として現れ得るものを取り出し、精神をこの運動の枠の中へはめ込んで、精神がその視野を限定するように導くのであるが、また精神の行動を効果的にするように導く。これは精神があらゆる方向に脳からあふれ出ているということであり、脳の働きは心の働きのごくわずかな部分に対応するに過ぎないということである。こうして脳の果たす機能、その果たす役割について考察したベルクソンは、心身問題について次のような結論に達する。

精神の生活は身体⁽²⁾の生活の結果ではあり得ない。反対に全ては身体が精神によって単に利用されるかのように進んで行く。従っ

て身体と精神が相互に別ち難く結び付いていると考える理由は何もない。[ES57~58]

3. 3 死後の生

これらのことからベルクソンは、脳の死、身体の死を「私の死」から区別することとなる。真の「私」とは、身体の死に拘束されることが無いのである。ベルクソンが死後の生を認めるのは、これらの理由による。ここから、身体が無くなった後も人格性の保存とその強化は、可能であるという結論が導き出る。

もし脳の働きが全ての意識に対応し、脳の働きと心の働きとの間に同等関係があるとすれば、意識は脳の運命に従い、死「身体の死」は全ての終わりであるかもしれない。しかし心の働きが脳の働きの外にあふれ、脳は意識に生ずるものの一部分を運動に現すだけであるならば、死後に生き残ることはありそうなことになる、証明の義務はそれを肯定する人よりも、否定する人のほうにかかって来る。なぜならば、死後に意識が消える⁽²⁾と信ずる唯一の根拠は、身体の分解するのが見えるということであるが、意識のほとんど全てが身体に対して独立であることもまた確認される事実である限り、その根拠には価値がなくなるからである。[Cf. ES58~59]

この結論は、更に「来世」、そして「永遠の生」の可能性へとベルクソンを導いて行き、彼は「意識にとって来世があるならば、それを探求する手段が我々に発見出来ない理由は無⁽²⁾」[Cf. ES7] という期待を述べている。もっともベルクソンは、その期待があくまでも可

能性の域に留まることを認めており、これらの問題を非常に慎重に、蓋然性の範囲の内でのみ論じている。「全ての経験は限られた持続についてのものではない。それゆえ不滅性そのものを経験的に証明することは出来ない。」[ES58]

4 「私」とは記憶であるか

ここまでの論述においてベルクソンは、身体・脳とは独立した記憶があることを示した。しかしながら、そのことが死後の生の証拠となり得るだろうか。これまでの議論は私とは私の体であるのか私の精神であるのか、従って死とは私の身体機能の停止であるのか私の魂が失われることであるのか、を巡ってなされて来た。しかしながら私の体、私の精神とはこの「の」が示すとおり、文法上からしても「私」という存在に包摂されているのであり、私に属する部分の内の一つである。すなわち身体や精神は私に従属しているのであって、「私」に等しいわけではない。私というものがあって初めて私の身体が存在するのであり、私が存在し得て初めて私の精神もまた存在し得る。よって、問われるべきは身体や精神を持った、その私とは誰なのかという点なのである。

例えば身体のレベルにおいて考えてみても、私の身体から摘出された臓器の一部が私の死後もどこかに保存され、あるいは他者の身体に移植されて残存したとしても、私の死後の生が確認されたとは考えられない。なぜならば、そのような臓器がすなわち「私」であるとは考えられないからである。このことから敷衍して、脳をはみ出している

とされるその記憶が、すなわち真の「私」であることが立証されない限り、身体の死に限局されない私の生を立証することも不可能なのである。

では、ベルクソンが私とは記憶であると考えた根拠とはどのようなものであろうか。例えば『意識に直接与えられたものについての試論』において決定論を批判するために、次のような例が挙げられている。ここにビエールという男がいるとして、哲学者ポールがビエールが行動する全ての条件を知った場合、彼の行動を確実に予見出来るだろうか、というのがその設問である。結論から言えば、それは可能であろう。しかし、そのためにはポールはビエールと全く同じ順序で同じ感情を経験し、二人の心は同じ経歴を持つていなければならない。なぜならば最も取るに足りない出来事でさえも一つの生涯の中ではそれぞれ重要性を持つものであり、また仮にそれが重要でないと仮定しても、そう判断出来るのは予見されるべき行動との関係においてなのであり、しかもその行動は仮説によって、未だ与えられてはいないはずだからである。さて、ここまで考えて来て、ポールとビエールとを二人の別の人物として区別することが出来るだろうか。仮に身体によって区別するならば、二人の心は別々の身体を己が身体として思い浮かべることになり、すなわち二人の心は異各々異なった経歴を持つことになってしまう。これは、二人の心が同一の経験、同一の過去と現在を持つという仮説に反する。結局、この二人は全く同一人物であると言わざるを得ない。[Cf. Essai139-144] 我々の心の深い状態は、我々の過去の全経歴を表し、要約しているのであり、これがすなわち「私」なのである。

決定論は精神を身体に等しいものと考え、身体の状態を行動の原因と考える。そこから、心理的事象は物理的事象に対するのと同じ方法によって解明され得ると考えられるようになる。すなわち我々の心理的状态を、脳という物質、エネルギー保存の法則に支配された物質の分子的状态に対応させてとらえ、生理的・心理的系列の全体をこの二つの状態の平行関係によって説明しようとするのである。しかしながら心理的事象が必然的に分子運動によって決定されることは決して証明されないだろう、とベルクソンは批判する。生体の状態と意識状態との結び付きは経験によっているのみで、これを証明することは不可能なのである。

身体という物質において作用と反作用とによって機械的に引き起こされる運動とは異なつて、予知出来ないという性格を持つ「意志による運動」の原因は、我々が各々「私」(je)、(moi)という言葉によって指し示すものである。この私とは、自己の身体から全ての方向にあふれ出て、空間的、時間的に身体を越えているように見えるものである。空間的には、我々の各々の身体ははっきりした輪郭によって限定されているにもかかわらず、我々は知覚の機能、特に視覚の機能によって、自己の身体を越えて星辰の世界にまでも拡がっている。時間的には、意識は過去をとどめ、時間が繰り広げられるにつれてその過去を意識自身に巻き込み、それによって未来の創造に寄与する準備をする。空間において身体よりもはるかに遠くまで拡がり、時間において持続するこの「私」は「魂」であり精神である。それは自己自身を新しく創造することによって行為を創造する。[Cf. ES30]

この魂、精神こそが、私の根底にあって私自身であるものなのであ

ベルクソン哲学の「生」は死を越えるか

る。

社会と接する表層から深みへと降りて行くにつれて、深層で働いている我々の意識は、ますます独自の、他人とは通約され得ない、また言葉で表すことの出来ない個性を我々に示すようになる。[Cf. DS2~8]

この深層に位置している心的事象をベルクソンは、諸瞬間が相互に浸透しながら絶えず新しい質を生成する、純粹持続と考える。この純粹持続の内に戻ることこそが、再び自己自身となることなのであり、この内的自我がすなわち我々の現実の自我、具体的自我なのである。

常識は我々の自我を持続の無い同質的で不変な空間的世界に生きる、情性的で必然的なものだと思える。これは個我ではなく誰でもいい人、唯一独自の人格の自我ではなく無人格的な、一般的無個性的な自我である。このような自我は幻影的自我、空間内に投影された自我の影に過ぎないとベルクソンは批判する。

しかしながら真の「私」の姿とはこのようなものではない。自我の表層を掘り進むにつれて、底に潜んでいた自我が本来の姿に戻り行く。そこにあるのは絶対に他の人と置き換え得ない唯一無二の主體的自我、すなわち真の自我である。自ら生きるこの能動的な自我は、前進する生命の個体における具現であり、創造的で自由な自我なのである。

5 生との合一

さて、身体の死によっても失われることのない真の私をベルクソン

は記憶であり精神であり内的自我であると考えた。このような真の自己自身の奥底に達することが出来た魂の理想の姿として、彼は神秘家を挙げて評価する。

直観は生を導いて我々の存在そのものの根底まで達せしめ、このことによってまた、生全体の根源そのものへまでも導いて行くであろう。神秘家の魂とは、まさにこの種の特権を恵まれた魂ではなかったらうか。[DS265]

自己の根底に達することは、ここではそのまま生全体の根源に達したことを意味している。ペルクソンはそのような特権的な人格にとって、自分が自分とは比較にならない大きな力を持った存在によって浸透され、しかも自分の人格がそこに吸収されてしまうのではないと感じることが可能であると考えている。このような人格は生と一枚になり、その根源の力と自己とは不可分であって、歓喜に包まれた歓喜、ひたすらに愛であるものの愛となる。いっさいのものが物欲の対象としてはもはや労苦に値せず、しかもそれらどの一つのものも、精神上の意義はこの上もなく高いものとなっている。今や彼においては、個々の特殊な事物への執着を離れることが、そのまま普遍としての生と密着することなのである。*[Cf. DS224~225]

魂を通して、魂の内で働いているのは神である。合一は完全であり、従って決定的である。もうここから後は、魂にとって満ちあふれて来る生があるだけだと言うことが出来る。もっとも彼自身の努力、忍耐、持久も依然として必要とされているのであるが、これらは自ら働くと同時に「働きを受ける」この魂の内に、おのずから生まれ、拡がって行く。こうした魂の自由は神の働きと一つなのである。そこに

必要なエネルギーの惜しみなき充溢が流れ出して来る源泉は、生の源泉そのものにはかならない。*[Cf. DS245~246]

自己そのものとなった神秘家は、同時に生そのものとなっている。

このようなことは、我々とは関わりの無い、特殊な事例なのである。しかしペルクソンは「もし一人の偉大な神秘家の言葉、あるいはその模倣者の一人の言葉が、我々の誰かの内に反響を見いだすとすれば、我々の内にも眠ってはいるが、ただ目覚めるのを待っている神秘家が有り得るのではないか」[DS102]と期待する。

ただ人間のみにおいて、特に人間の中の最上のものにおいて、生命の動きは障害なく続き、生命の動きが途中で創造した人体という芸術作品を通じて、精神生活の限りなく創造的な流れを発する。我々が直観の働きによって生命の原理そのものまで入り込もうとするならば、彼ら「神秘家」の感ずることに共感するように努力しなければならない。*[Cf. ES25]

このことを可能にするために、神秘家の存在は大きな役割を果たす。真の神秘家は、ただ己の内にもみ自足してはいない。「完全な道徳の化身、善の偉人は人を漁る」[DS30]のである。

神秘家が自分の内部に流れ込むままにさせたもの、それは、彼らの内部にとどまってはならず、彼らを通して他の人々へまで達することを願いつつ、高みより降り来った流れである。[DS102]人々が耳を傾け、やがては自分のものにするはずの言葉は、「既に自らの内部にその反響を聞いていた言葉」[DS31]なのである。人は一人の人格の呼びかけに答える。この呼びかける人格とは、特権的なある人格、すなわち道徳的生の示現者自身の人格、あるいはその模倣者

のそれでもあろうが、またある状況においては、自己自身の人格である、ということさえも有り得るのである。

ベルクソンは身体の死後にも残存する記憶と、自己の存在が既に生そのものとなっている神秘家との例を根拠として、我々の生が身体の死に拘束されることなく永続することを主張している。ただし、「既にこの地上で、魂の活動の内には肉体と独立に行われる部分がかなりあるという事実によって、死後存続は全ての魂に保証されていると見られるが、この存続は、少数の選ばれた魂がこの地上で既に入る永遠の生命と一つに融合するであろうか。」「DS281」 と自らに問うベルクソンは、この問題が未だ未解決であることを認めてはいる。慎重を期してこのように断定を避けてはいるがただ、その蓋然性を主張しているのである。

「私」とは何か。本論文において我々はこのような問から出発した。そうして、私とは身体や脳、あるいは自我の表層の謂ではなく、純粹持続である私、内的自我であり、精神・魂・記憶であるところの、人格を持った私であるということが明らかにされた。そこから、そのような私はすなわち生そのものである、という結論に達した。極論すれば、ベルクソンにおいては、生は死の対義語ではないと言っても良いだろう。我々の生は、死と同じ階層に置かれて生か死かという二者択一に付されるようなものではない。例え一般的に死と考えられているような状態、すなわち私を構成する一部分が失われることがあり得ても、私という存在そのものが非存在になり、私の生が死に凌駕されるのではない。仮に死と呼ばれるようなあり方をとってなお、私は持続し続けて行くのである。

6 生の流れと「私の生」

さて、純粹持続する生の流れの中に熔融し、生そのものと根源を等しくする我々の生が、死を越えるものであることが本論文で結論付けられた。しかし我々はここで、このような生が真に「私の生」であるか、という疑問に直面しなければならない。私の生が生一般に熔融して終わるのであれば、それは言わば大文字の自我とでも言うべきものであって、私の「私」性はその流れの中に失われてしまう。真の私が究極的に大文字の自我なのであれば、それは定義上生そのものののであるから、死とは相いれないのはむしろ当然であろう。しかしそこでは、生きているのは大文字の自我であって私ではない。言葉を換えて言えばそれは、「私」が死んでいる、と考えることも出来るのである。

大文字の自我と小文字の自我、生一般と私の私性の関係は、容易に論すべきではない大きな問題であって、稿を改めねばならないが、ここではもっとも生の根源に近づいたと思われる神秘家の場合を示しておこう。

神秘家の人格は、魂を燃え上がらせる情動と一つのものになっているだろうが、しかもこの個人の人格がこれほどまでに自己自身であったことはない。[DS268]

なぜなら、神秘家が合一したところ、それはすなわち神の内であるが、その神は「愛であり、そして愛の対象である」[DS267] ような存在であるからである。「我々が神を必要としているように、神は我々を必要としている。それは我々を愛するためである。創造とは、創造する者たちを創造し、神の愛を受けるに値する存在を仲間とする神

の業である。」[DS270]

これらのことは、一人特権的な魂の内にのみ起こることではない。「私の内部に流れ込んだ愛、そこに神秘家の一人一人の独自の個性が刻印されている愛、一人毎に全く新しい情動、神秘家一人一人が彼自ら愛されると同時に、彼を通して他の人々の魂もまた人類への愛へと開かれるようにする愛」[DS102] が我々の内にも流れている。私の内で神が働き、私と神は合一していても、なおベルクソンは「私」を単なる生を盛るべき器とは見なさないのである。[Cf. DS245~246] かくして創造された我々一人一人は生との一致に向かいつつ、なお私という人格を保っている。

創造するエネルギーは愛として定義されるべきものである以上、愛し、かつ愛されるように定められた存在者が存在に召されるのである。こうした存在者は、このエネルギーそのもののほかにない神とは別のものである以上、宇宙の内へと生み出されるほかはなく、またこれこそまさに宇宙が存在するに至った理由にほかならない。[DS273]

ここで、生に「私」性を付与するものとして、物質・身体が改めて浮上してくる。先に挙げたピエールとポールにおいて、二人を分かつとすればそれは、異なった身体を持っているという点であった。二人の各々が持つパースペクティヴや視点が空間の内に位置する場所、身体の位置が異なることが、二人を別々の人格にしていたのである。ベルクソンも「靈魂 (âme) とは、生の大河が細い流れに分かれ、これらが人類の身体を流れて過ぎるものにほかならない。」[EC270] と述べて、大文字の自我から小文字の自我を切り出して来る役割を身体

に負わせている。そうして、「意識はこの世で出会う物質を通過するとき、いわば鋼鉄で鍛えられて、より濃密な生のために、より効果的な行動に備えているのではないか」[ES27] と推測している。

このように「私」というものに身体が寄与する様を追及すると、身体之死とともに生一般が途絶えることはあり得ないとしても、「私」之死は身体之死と関係を持ち得るのではないか、という仮説も今一度可能になって来、冒頭の身体之死の問題へと循環しなければならなくなる。本論文ではこれ以上この新たな問題に立ち向かうことは出来ないが、今後の検証を待つべき課題であると言えよう。

おわりに

本論文において我々は、ベルクソンの生の哲学から私とは何かという問題を、特に私とは死ぬものであるのか、という視点において探求して来た。その結果、私の「私」性とは身体にあるのではなく、自我の奥底に、すなわち記憶、精神、魂にあることが論じられた。ここから、私の生とは身体の死によって終わりを告げるものではなく、死を凌駕して根源から流れ出でる生の大河と源を等しくし、死を越えて存続するものであることが明らかにされた。しかしながら、身体之死によって灰燼に帰すことを免れた自己は、翻って生そのものの内で自己の個性性を危うくすることとなった。自己が自己自身でありながら、尚且つ生と一致する可能性を、我々は更に考究して行かなければならない。

注

〔 〕は筆者による補足を、傍点は筆者による強調を表す

ベルクソンの著作は以下のように略記する

Essai: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889, P.U.F. 《Quadrige》: 1993

MM: *Matière et mémoire*, 1896, P.U.F. 《Quadrige》: 1990

EC: *L'Évolution créatrice*, 1907, P.U.F. 《Quadrige》: 1994

ES: *L'Énergie spirituelle*, 1919, P.U.F. 《Quadrige》: 1993

DS: *Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932, P.U.F. 《Quadrige》: 1992

PM: *La pensée et le mouvant*, 1934, P.U.F. 《Quadrige》: 1993

(1) 河合隼雄、『無意識の構造』、中公新書、一九七七年、二五頁

(2) シュヴァリエとの対話においてベルクソンは、個々の人格が死後に存続することを信する理由として、次の三点を挙げている。

1 現世において彼岸に参加していると感ずる神秘思想家の経験が相互に一致していること

2 意識、つまりこの世において既に身体的器官として的大脑から無限にあふれている魂

3 心霊学が、肉体の目で見える機構によって、死後存続の低い部分における何ものかを知覚させてくれるという点

Chevalier, Jacques, *Entretiens avec Bergson*, Plon, 1959, p. 160

ベルクソン哲学の「生」は死を越えるか